

「香川大学教育研究」 発刊によせて

香川大学長

木村好次

外国旅行もいいけれど、ホテルのチェックインにしても英語が分からなくて、という、まあありふれた心配があります。しかし、本質的な楽観論もある。こちらは泊まりたい、むこうは泊めたい、問題があるはずがないというわけです。大学の授業だって、本質は同じはずでしょう。学生は勉強を教えてほしくて大学へ来る。先生の方は教えたいから大学に勤めている、というわけですから。

ところが、それがうまくいかなくなってきた。世の中でいわれていることですが、小学校・中学校では目を輝かせていた子どもたちが、受験戦争で力を使い果たし、大学生になるとその輝きを失って講義よりメールに熱中する。となれば、先生の方も授業に熱が入らない。インディファレンス・スパイラルとでもいうべき悪循環に陥る。これで、次代をになう若者が育つのだろうか。

そもそもの原因は、進学率が高くなったことにあるともいわれます。だいたい人間の意識は、そのような状態にある人間の、同世代に占める割合によってきまるところが大きい。ぼくたちの年代では10パーセントに満たなかった大学進学率が、いまや40パーセントを超え、2009年度には、希望者がぜんぶ大学に入れる勘定になるといわれています。

時代は大きく変わっています。このような時代の教育のニーズとはそもそも何か。大学では学生にいかなる付加価値をつけるべきか、どうすれば大学を“知るつぼ”にすることができるのか、根元から問いなおさなければなりません。香川大学において、大学教育開発センターを中心に進められている大学教育の研究が、われわれが直面するこのような難問に、あざやかな切り口で斬り込んで下さることを期待しています。